

2024年4月14日 No. 3715

先週の講壇から

” 主も共に働き ”

マルコによる福音書 第16章14節～20節

聖句「弟子たちは出かけて行って、至るところで宣教した。主は彼らと共に働き、彼らの語る言葉が真実であることを…お示しになった。」(16:20)

1. 《寛ぎの瞬間を…》 新会堂を建てたばかりの教会で、懇談会をしたところ、旧会堂での掃除、特にスリッパ拭きをしながら、お喋りをした思い出が語られました。幸せな瞬間だったのです。各自の空き時間を利用して、責任分担を果たした方が効率的かも知れませんが、けれども、独りで行なう奉仕には和み、寛ぎの瞬間が生まれないのです。「奉仕」という事柄の本質は、誰かと一緒に働くというところにあります。人が集って共に働く時、主も共に働かれるのです。
2. 《フローティング》 1990年代半ば、折角「統一協会」から脱会を果たした元信者たちが舞い戻ってしまう不思議な現象が起きました。宗教心理学者は「フローティング／浮き草状態」と名付けました。救出活動の中で、本人たちはカルトの実態と向き合い、自分たちがマインドコントロールされ、搾取されていたことを知ります。家族が仕事も投げ出して自分を救い出そうとしている深い愛情によって脱会を決意したのです。ところが、心の空白に耐え切れないで、ふっとカルトに戻ってしまうのです。彼らを立ち戻らせてしまうのは、教理や信仰ではありません。仲間たちと共に、必死に耐えた過酷な隷属の体験です。苦しかったけれども、あの時が自分の人生で一番熱かったと感じてしまうのです。
3. 《愛と喜びの紐帯》 実は「戦友会」と同じ構造です。思い出したくもない悲惨な軍隊生活、戦場体験でありながら、「同じ釜の飯を食った」仲間たちと、苦労を確認したいのです。しかし、人の結び付きとしては「悲しい絆」です。理不尽で冷徹な組織構造に磨り潰された経験の共有です。さて、復活の後、弟子たちは「不信仰でかたくなな心」を戒められています。イエスさまは、もっと素直で従順な人を弟子に迎えればよかったのだと思います。でも敢えて、このような人たちを招かれているのです。彼らの宣教は行き当たりばったりです（「至るところで」）。軍隊もカルトも高度に組織化された集団です。末端まで支配され管理されていて、人間は機能的に働くのです。それに対して、イエスさまの福音宣教の世界は、効率の悪い出会いでした。教会は「喜びの紐帯」「愛の絆」なのです。

朝日研一朗牧師